

Title	社会的なものの単純化：コロナ危機下のドイツ社会
Sub Title	Simplification of the social : the German society in the corona crisis
Author	Stichweh, Rudolf 森川, 剛光(Morikawa, Takemitsu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.89 (2020.) ,p.91- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000089-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈翻訳〉

社会的なものの単純化 コロナ危機下のドイツ社会¹
Simplification of the Social. The German Society in the Corona Crisis

ルドルフ・シュティヒヴェー*・翻訳：森川剛光**

Rudolf Stichweh

コロナ・パンデミーによって世界社会は未知の状況にさらされている。もし全ての機能システムが一時的に唯一の命法に従うならば、何が生じるのだろうか？

社会学は、社会を産出する分化の形式によって社会を記述してきた。分化によって意味されるのは、社会的出来事と社会参加者の、社会を成り立たしめている部分システムへの分配のことである。古いヨーロッパでは、18世紀に入るまで、そしてその後も長いこと、身分と階層をその主要な部分システムと理解していた。貴族があり、聖職者があり、様々な市民集団があり、農民があった。社会秩序はこのような集団と通常一生涯にわたる、このような集団ないしは身分の一つへの所属の秩序であった。

我々が250年来その中に生きている近現代社会は、このような秩序形式が完全に置きかえられたことに起因している。階層的に秩序づけられた身分に代わって、事象的な主題と社会の機能的配分によって秩序づけられたコミュニケーション・システムが登場するが、それは例外なくグローバルなコミュニケーション・システムなのである。政治、経済、宗教、科学、教育、法、芸術、スポーツ、マスメディア、保健・医療制度、そして親密な関係と家族のシステムである。今日、その生活の総体を、こうした機能システムの一つの中のみにおいて遂行する人はいない。部分システムに所属する代わりに、人は逐一そのような機能システムに参加（これを社会学者は包摂と呼んでいる）するのである。そして、この逐一機能システムに参加する人格（パーソン）というものが個人なのであって、個人はその参与の極度の多様性によって個人化されている。個人というものはこういった機能システムの外部に存在するのであり、個別の出来事においてのみ機能システムと結合される。機能的な秩序それ自体とならび、個人というものは近現代社会のもうひとつの革命的な発明である。

コロナ危機にとって社会学の鍵となる問題というものは、それがこの近現代の社会的秩序というものを一時的に問題とするか否か、どのように問題とするか、そしてこれが長期的には社会の発展にとって何を意味しているかという問題である。まずもってコロナ危機の基礎的な出来事は、有機体のウィルス

¹ 出典：Frankfurter Allgemeine Zeitung, 2020年4月7日付, p.9. 本文中の [] 内の語句は訳者補足。

* ボン大学 国際科学フォーラム所長・教授

** 慶應義塾大学文学部教授

による感染であり、同時に個人のウィルスによる感染と罹患である。そこから二つの接続問題というのが生じている。まず、(潜在的に)感染したある個人が感染を他の個人にうつすことをいかにして妨げることができるかという問題である。そこから危機における新しい生活形態である、個人の他の個人からの社会的距離の問題が生じている。そして第二に重篤化した場合、個人の生存というものがいかに保証されるかという問題である。

目につくのは、第二の問題が支配的であるということである。感染再生産の割合がある水準に保たれ、可能な限り多くの個人の生存をより蓋然的なものにするために、我々は個人に、維持することが困難な社会的距離というものを指示する。非常に印象深いのは、この最後の観点というものがいかに支配的なものになっているかである。一人一人の個人というものが重要なのである。一人として死なせてはならない。近現代社会における個人というものの著しい意義というものが、コロナ危機においては、可能な限り多くの個人の生存という最高度の価値と競合する他の価値観というものはありえないという点で示されている。この点で、つまりコロナ危機の政治的社会的構成活動は、——現在見たところすべての国々で——近現代社会の根本的な構造決定との関係で構造保守的に作用しているのである。

それゆえ非常に劇的になるのは、この危機における近現代社会の他の構造決定の一時的断絶、そこでは優位の秩序、ないしは様々に異なった社会的意味を統一する秩序はもはや存在しないという、複数のグローバルなコミュニケーション・システムの水平的な協働としての機能分化の発生との一時的な断絶である。この秩序は、すべてが同様に意義を持つという原理的に水平的な秩序であるだけではない。これはまた極度に動的な秩序であり、それぞれの機能システムが、他の機能システムにおける急速で驚くべき発展により、絶えず必要とされ、動かされている。この記述は両方とも、現在の状況においてはもはや当てはまらなくなっている。歴史的に前例のなかった機能システム固有の秩序というものは停止した。

社会の諸機能システムの中では、健康システム[保健システム]は、今日では再び疾病システム[医療システム]になっているが、注目すべき「新参者」(late comer)である。まだ1900年頃には保健システムというものは存在せず、せいぜいのところ個別のクリニックと個別の医者が存在したに過ぎなかった。アメリカ合衆国では、今日にいたるまで治療上のニヒリズムというものが支配的で、それゆえに反省的な医者は他の医者に手術しないように警告するのである。なぜなら、手術というものは損害をもたらす危険があるからである。1900年頃のドイツの状況というものは、当時の最も有名な小説二篇に近づけば、思い浮かべることができる。1899年に出版されたフォンターネの小説“Stechlin”では、主人公であり作者の分身であるドブスラフは、自分の死の直前に医者との接触を絶った。なぜなら人々は、社会民主主義とか非自由主義的なプロテスタンティズムとか、そういう理念と結びついていたからであって、その理念をドブスラフは尖鋭化した形で拒否したのである。医者というものは明らかに無用な存在であり、曖昧なことを話し、見通しの利かない一般的な処方(緑の鍋)をするに過ぎない。1901年に出版された、トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』においては、一族が避けることのできない強制的な体験である死という劇的な劇場において、医者というものは無害な脇役に過ぎなかった——処方するのは葡萄と砂糖パン少しずつ。同時に、他者の死への参与というものは「人間の条件」の厳格な学校なのである。

わずかに120年後のコロナ危機において、歴史上初めて医療システムが社会全体となっている。しかも[ゴフマンの意味での]全体的な制度として、その極端な形態における医療システムである。つまり、個

人を生命の遂行の総体において統御し、この形態で個人の最終的な意義を説明する集中医療という形態である。医療システムの彼岸に残っている社会は、そのすべての活動において、固有の総和公式“flatten the curve（曲線を緩やかにせよ）”において要約されており、それはそもそも次のことを意味するのである、すなわち、あらゆる社会的行動の帰結として社会の感染の動きは、ある時点で利用できる医療システムの処理能力、とりわけその集中医療の処理能力に適合させなければならないということである。

社会の他の機能システムから何が生じるのか？明らかに、さらに2つの主役がいるように思われる。もう1つの主役は社会の政治システムに割り当てられている。政治システムは、社会においてそれのみに固有の集散的に拘束力のある決定の産出に寄与する。この状況で誰にも当てはまるに行動の指示が求められ、この働きができるのは政治システムにおいて他にない。時間は希少なので、集散的に拘束力のある決定の実行がもっとも長期的かつもっとも安定して確立されている、地域国家・国民国家が決定のレベルとして特権化される。

しかし、すべての国民国家・地域国家がおおよそ同じ決定をするということは変わらない。このことは、2つの理由から説明できる。政策決定者がその決定を行うのは、独自の知識の貯蔵庫からではなく、医療システムの知識の貯蔵庫と科学システム知識の貯蔵庫を用いることができるアドバイザーに依拠しているのである。この場合、この知識の貯蔵庫は通常よりもより大きな意味を持っている。なぜならば、当該の政治家はこの決定の領域において、比較しうる過去の決定を参照することはまったくできないか、ほとんどできないからである。つまり政治システムにおいて、固有の決定の伝統というものがあることは存在しない。しかし、政治システムのアクターが引きあいに出すアドバイザー——細菌学者、疫学者等々——は、国民的知識の基盤に基づいているのではなく、グローバルな科学共同体における知識の力学に依拠している。その限り、彼らが与える助言というものは必然的にグローバルな研究知識によって規定されている。

さらに政治家には、他国の他の政治家の決定を模倣するという傾向がある。しかし政治システムのあらゆる決定において、1つの契機を強調しなければならない。つまり、ここで決定を下しているのは極度に単純化された政治システムであり、それは決定テーマの極度の位階制ヒエラルキーを知っており、この位階制自体については決定することができない、それ故に民主的な議論が自由にできないと信じているのである。この位階制というものは医療制度に過度の負担をかけないという命法と、これまたまた各個人の同等の取り扱いと生命の維持という最終的な意義によって指令されているわけである。この命法の実現において政治は失敗しうるが、かといって自由に処断できない命法である。

コロナ危機において存在する第三の主役は科学システムに割り当てられている。これもまた危機において著しく単純化されている。科学システムの作動オペレーションの大部分はもはや生じていないか、科学というのが図書館や研究室なしのホームオフィスで行われて行われる限り、私的領域においてのみ行われている。しかし同時にウィルスの科学的研究と感染症研究に、ワクチンと医薬品の探求へ、近現代社会のいかなる他の行為実践と結びつけられるよりも多くの希望と期待が寄せられている。この点でも改めて研究委託と研究決定に、決定者としての政治は関与している。しかし、政治の観点自体からは、ここで広範囲に極端な決定への強制から生じているように見える決定を政治は下している。

数週間以来、我々の生活遂行と我々の情報行動をほとんど完全に規定しているのは、この極度に切りつめられて遂行されている機能連関である。我々の生活が、このように単純化したことはかつてなく、ここで問題になっているこの数週間が過ぎ去ってしまったら、このように単純になることはないだろう。

う。我々はいま戦争の最中にいるのだという比喩は、適切なようには思われぬ。なぜならば戦争というものは、むしろあらゆる機能システム連関への要求の増強をもたらすからである。これに対してこの危機において、我々はその反対面を選択しているように思われる。社会生活の大部分は停止させられているのである。

これは何を意味するのだろうか？他の機能システムはどのように見えるのであろうか？もう1つの機能システム、マスメディアが「体制に重要な」機能システムのリストに加えられうることはさしあたり明らかだ。行動指針がどうであるのか、開始された行為がどのような結果をもたらしているのか、そしてあらゆる所、あらゆる観点でこの危機がどのように経過しているかは、結局のところ報道されなければならない。この課題はマスメディアの課題、そもそもこれのみに割り当てられている課題なのである。マスメディアによって初めてこの危機は、1755年のリスボン大地震で世界のコミュニケーションがおおよそ唯一の出来事に焦点を当てて以来、これまで存在する「コミュニケーションが」最も濃縮した世界的出来事になった。マスメディアはこの課題を、他の機能システムにおいても観察可能である排他性をもって受け止めている。その際マスメディアのデジタル化は決定的な可能性条件の1つである。

第五に経済というものも存在している。マスク、呼吸器、その他の医療上の機器を製造し、世界社会の個人に食糧を供給しているのも、これもまた個々の点で「体制にとって重要」なのである。しかし、ずっと目につくのは経済が人類史上初、ひょっとしたらかつてなかったような仕方ではほとんど停止させられているということである。経済システムの中で動機づけられ、生じる支払いによる、経済の不断の再生産に代わり、経済従事者の支払い能力の国庫からの再生産が立ち現れている。その規模は、想像できない程莫大なものであり、わずかに数週間のうちに継続不可能になってしまうということは歴然としている。

教育上の出来事も操業停止されているか、あるいは——数百年来もはや見たことがないように——排他的に家族の管轄下に差し戻されている。保育所と学校は閉鎖され、大学も同様に閉鎖されているが、幼稚園と学校が行えないこと、つまり近い将来の完全なデジタル化教育への移行というものを計画しているのみである。大学においては、この新しい状況がこの一点において熱狂を引き起こしたことは見逃すことはできない。ここでは社会的に大規模な実験が準備されており、その実験の結果はどうかは、非常に興味深くありうるだろう。

スポーツもまた、機能システムであることが証明されようが、これもまた完全に停止された。確かに、スポーツは、まだ個々人のジョギングとして許容される実践として「社会的」接触禁止という条件に統合され、この意味で「体制に重要なもの」として受け入れられている。しかし、あらゆる競技と競技のための非個人的なトレーニングはすべて、世界規模で100%存在を停止した。スポーツシステムは身体システムである。身体の実践は高度に感染の脅威に曝されている。それは臨在（共在）に依拠しており、原理的にデジタル化はほとんど不可能である。今日の経験は、eスポーツというものはそもそもスポーツではないし、全く別のタイプのシステムなのであるということを経験するだろう。これに並行してマスメディアは非常に印象深い働きをなしている。通常、それはスポーツの出来事についての報道に高度に依存している。コロナ危機「勃発」の数週間後にも、新聞は常に毎日2頁から3頁、スポーツ欄というものを生産している。それは報道であるが、そもそも何も出来事が生じて無いことを報道する報道である。

芸術システムは、それがパフォーマンスと博物館美術館における臨在に依拠している限り、同様に広

範囲にわたり休止している。一連のケースにおいて、デジタル化された代替サービス、あるいは公演補完とデジタル営業が存在している。しかし、芸術にとって規定的なのは、科学においてそうであるよりもずっと強力に、私的空間、私的〔個人の〕アトリエ、私的〔個人〕スタジオにおいて芸術が産出されるということであろう。その限り、この場合——危機的な出来事に対して守られた——本来の生産過程への退却が当然だろう。その結果がどうなるかは、おそらくまもなく見ることができるであろう。

宗教のシステムは、コロナ危機の本当の敗者であることが明らかになろう。信者による濃厚な社会的接触は、あらゆる参加者の物理的な臨在に支えられ、宗教性の多数の形式にとって特徴的であるが、これはすでに一連のケースにおいて危険な危機の温床であることが証明された。見たところ、ウイルスによって引き起こされた危機的な出来事というものの、宗教的な解釈の変種は、どこでも自由にならず、重要な役割を果たさないということがより意味を持つてくるようだ。その限り、コロナ危機に対する我々の反応が、特に近代的な「個人性のカルト」によって規定されている限り、これもまた同様に準宗教性の一形式であり、これに対して伝統的な超越に定位した宗教性が戦うことは非常に困難なのである。そして、それは、この出来事が誤った行動に対する〔神の〕処罰と解釈するゲームを行うことはもはやできない。この伝統的な意味資源はすでにリサボン大地震の時に使い切ってしまった、イエズス会には当時非常に高くついたわけである〔リサボン大地震後のポルトガルでのイエズス会の禁止・解散のこと。当時イエズス会は大地震を不信仰に対する神の罰として、政府を激しく攻撃した〕。

この〔社会的〕接触禁止の状況において、結局すべてが機能システムとしての親密な関係と家族を指し示しているように思われる。これは誰も止めることができず、一時的に解消することもできないシステムであって、例外は高齢で要介護の家族メンバー訪問禁止とコロナ患者自身には家族の絆が一時的に断絶するということである。しかし総じて家族の絆というものは、社会的なものの基礎的層と解釈され、確かにそれは固定されねばならないが、非常に危険に満ちた仕方家族の絆の安定性が想定されているが、しかし中断されることは許されない。この場合このシステムが失効することはない。しかし、非現実的な仕方安定的なものと考えられている。それも数週間後にはますます問題があるものとなってくる前提である。

我々が試論的に非常に簡潔にスケッチした社会の像は、例外的なもの社会実験のリスクをはっきりとさせた。社会というものは長期間静止しないだろう。もし機能システムが再びその力学に復帰したならば、一時的にスイッチ停止させられた機械のような、通常オペレーションを再開する何かの再始動であるのみではない。これは常にまた新しい開始である。科学的な問題設定というものは引き続き重要なのだろうか？貿易協定に危機以前と同じ前提条件というものが妥当するのだろうか？計画された映画のテーマは、数週間前と同様に魅力が期待されるのだろうか？すべて別様であるのではないだろうか？これはすべて関わった人間にとってリスクであると同時にチャンスでもある。機能システムすべてのこのような新しいスタートというものは、近現代史においても——二つの世界大戦という例外を除けば——まだ存在したことがなかった。構造上の断絶というものが生じるかもしれない。しかし、それがどのようなものであるか我々は知らない。